

## 新美南吉資料研究

### 「ハル賓日日新聞」掲載作品について

研究員 齋藤 寿始子

この研究の目的は、児童文学の作家、新美南吉（一九一三―一九四三）の初出誌紙に関する調査と考察の一つとして、既に刊行した『校定新美南吉全集』全二十巻・別巻二（一九八〇―八三・大日本図書）の空白を埋めるものである。『校定全集』の編集に携わった一人として、未調査の部分を明らかにするのは責務と考えている。

今回は、『ハル賓日日新聞』を初出とした作品に関して、現在、資料の保存が確認されている唯一の機関である、中華人民共和国大連市図書館（旧満鉄資料館）にて、一九八八年九月二十日から三日間、鳥越信囑託研究員（大阪国際児童文学館総括研究員）と共に調査することができた。調査に至る経緯と資料の保存状態、新聞題字の確認、南吉寄稿当時の同紙についてのあらましは、大谷大学真宗総合研究所『研究所報』二二二号（一九八九、七、二〇）に記載した。本稿とあわせて参照していただきたい。これと重複するが、大連市

図書館所蔵の『ハル賓日日新聞』の保存ファイルについては、便宜上、繰返し記述しておきたいと思う。排架号四七で現存するのは、次の三綴のファイルである。

- ① 一九三九年（康德六年・昭和一四年）四月―六月。
- ② 同 年 一〇月―十二月。
- ③ 一九四〇年（康德七年・昭和一五年）四月―六月。

調査に臨み、主要な課題として用意したのは、以下の四点であった。（一）全発表作品の確認、（二）初出年月日と朝夕刊の確認、（三）初出発表形態の調査、（四）新聞題字の確認である。（四）については、既に報告した通り『ハル賓日日新聞』であった。

調査の結果は、『校定全集』の当該事項と対照して表にまとめた。写真撮影は、三枚だけ許されたので掲載させていただく。そこで本稿では、調査対象作品とその周辺について若干の考察を試みたいと

思う。

(一) 発表作品の確認

『哈爾賓日日新聞』と南吉寄稿について、『校定全集』では第三卷「最後の胡弓弾き」の解題(一九六頁)と、第八卷の詩「ねぎ畑」の解題(七八頁)に記載してある。

従来、『哈爾賓日日新聞』を初出とする作品は、南吉が勤務先の安城高等女学校の生徒に手伝わせた作ったスクラップ・ブックに貼付された作品を基に、南吉の日記、江口榛一・巽聖歌・河合弘宛書簡、江口・巽・河合等の回想等を参照して考察されてきた。その結果、スクラップ・ブックには概ね発表作品を貼付していると推定してきたのであった。しかし疑義として、「冬から春へ」と題した詩の(上)がスクラップされていないが、存在したのか否か、(中)は(上)の誤植であったものか。江口榛一の回想に「短篇小説をはじめ、詩・童謡。俳句、その他なにかぎらず、送ってきた原稿は、ほとんど間髪を入れず、割付けをして工場におろした。」(『新美南吉童話全集』付録No3「哈爾賓日日の頃」一九六〇 大日本図書)とあるが、スクラップ・ブック貼付作品に俳句は見出せない。その他、一九三九年五月一八日の日記に「五月の詩十篇ばかりを送ってやった。」ともあるが、江口との間に原稿料のことで齟齬が生じ、同月二十九日の日記に「詩の原稿を返してよこした。」とある。そ

の後、両者の間は元に戻り、南吉は再び紙面に登場するのであるが、「五月の詩」はどうなったものか。江口の先の回想では、送られた作品はほとんど活字にされたところのあるものの、南吉の日記は一九三九年六月一四日から同年十二月二日までの間が紛失されているため、寄稿の状況を推定する手がかりが乏しい。

以上のことから、調査の具体的な作業には、俳句、詩「冬から春へ」上、「五月の詩」の掲載の有無と、未発見作品の発掘を含めて、発表作品の確認を行った。結果は大連図書館保存資料の三つのファイルからは、俳句、詩「冬から春へ」(上)、「五月の詩」および新しい作品は一篇も見つけ出すことはできなかった。

南吉の寄稿期間、すなわち友人江口榛一が『哈爾賓日日新聞』の学芸欄を担当していた時期の、南吉の日記および大連図書館資料の紛失・未発見の期間についての消息は、逆に南吉の残したスクラップ・ブックが伝えていることになる。今回の調査の結果、おそらく南吉は、江口から送られてきた新聞の発表紙面を、全て切り抜いて整理していたと推定して差しかえないと確信を得た。なお、今回大連市立図書館から転写稿をいただき、同一である確定もできた。

さらに、このスクラップ・ブックの信憑性を高める新資料として、東京外語時代からの親友であった河合弘宛の書簡が出てきた。一九八八年八月中旬、大垣市築捨町の河合の生家から河合の弟森末雄氏

により発見され、河合夫人みち氏とともに公開したものである。一九三五年三月二日から一九四〇年九月二三日の消印を残す、封書一九通、葉書八通は、赤座憲久氏によって一九八八年一〇月の日本児童文学学会中部例会および一九八九年一月の日本児童文学学会研究大会に於て整理・報告された。この二七通中に、『哈爾賓日日新聞』寄稿に関連するものが三通含まれている。

一九四〇年五月一六日付けで、新聞への寄稿のための創作に關し例の「十銭白銅貨」はなかなか手におへない。

同八月二二日付には、「家」が好評であったことを記した続きにそれから手品師と十銭玉の話は一月程かかつて書きあげ（五十枚）〈注・正確には四十五枚〉江口のところへ送りましたら、大層よい小説だからこんな新聞にのせるのは勿体ないと云つてのせてくれませんでした。そのうちにどこかの新聞か雑誌に出るかと思つております。

とあり、これは先の「十銭白銅貨」すなわち、後に江口の斡旋によって雑誌『婦女界』一九四〇年一二月号に掲載された「銭」である。

更に、同九月二二日付けには、寄稿終了に關わる記述がある。僕の小説を読みたいとある。読まれたくない程のものではないが、生憎もう新聞がない。東京の友人に義理があつて送つてしまったのだ。手許にはスクラップ・ブックに切つて貼つたものがある

ばかりなのだ。（中略）小説はやめたくない。ハルピンの江口が新聞の学芸欄担当をやめたから勢い僕の小説はもう発表できなくなった。

このことから、スクラップ・ブックは南吉自身によって丹精して作成されたものであることが、より明確になった。

同時に、この一連の書簡から、大連市図書館での調査の際に、一九四〇年七月以降のファイルが失われていたために確定できなかった寄稿終了の時期が、作品「家」の第十回、一九四〇年七月五日（金）〈推定〉と判断することができた。先の『研究所報』二二二号の報告より、前進したことをよろこびたいと思う。（注・『所報』二二二号に六月とあるのは誤り、七月に訂正させていただく。表参照）

#### （二）紙面と掲載状況

所報に記したように『哈爾賓日日新聞』は、朝刊四頁、夕刊八頁であった。当時、日本からの情報が満州国に伝えられるための所要時間から、こうした紙数となったものであろう。同時に、ニュース性の少ない文芸欄が、朝刊に組まれていた事情も了解できる。寄稿作品の掲載欄が、最後の「家」を除いた全てを朝刊文芸欄としている理由であろう。

「家」が夕刊に載つたのは、朝刊四面には、山中峯太郎の「日本の謀人」が挿画入りで、長期連載されていたこととの関係が考えら

れる。一九四〇年四月一日付で、二〇一回の山中峯太郎の作品と、南吉の「家」を同じ組み方で、同じ朝刊に発表することは憚られたのであろう。このことは山中峯太郎と南吉を、同格の扱いにしようとした学芸欄担当記者の江口榛一の作品評価の表われと見る。友情に流されたものではないことは、前述のように、「家」に続いて送られた作品「銭」が、江口の好意で『婦女界』に回された事実が物語っている。これにより南吉の筆名が、一般に知られる契機となっている。

また、江口は、文芸欄を朝刊三面から四面へ移している。四面は、一面に次いで読者の目を集める。そのトップ、右上から組まれたり、対応する左上から扱われていることも、南吉の作品が好評であったことを裏付けている。本稿では、作品論にはふみこまないが、この期の作品の傾向が、当時の読者によって迎え入れられるものであったことの傍証となる。南吉の「最後の胡弓弾き」が掲載されていた時期、哈爾濱では、坪田譲治原作の映画「子供の四季」が人気を博していた。紙上に、感想文・感想自由画展の記事があった。

江口榛一は、明治大学専門部に新設された文芸科の第一期であった。山本有三、豊島与志雄、横光利一、小林秀雄、岸田国土等の講義を受け、阿部知二、里見淳のゼミに属した。渡満の際には、岸田国土の紹介を得ている。南吉との交流は、その学生時代に、澄川稔

たちとともに創作批評の会をもっていたことに溯る。南吉が一歳年長で、すでに『赤い鳥』の書き手として、白秋門下として活躍していたことによるためか、江口は南吉より一步控えたもの言いをしている。

江口は人生の後半、芥川賞の候補作に上る作品を書きながら、競争詩を多作した反省から、キリスト教に入信し、教会活動に物足らず、個人的宗教実践のために貧者救済の「地の塩の箱」の運動に情熱を傾けた。そして、貧窮の中で自死した。破滅的ではあったが、志の高い純粋な文学者であったと評される人物である。

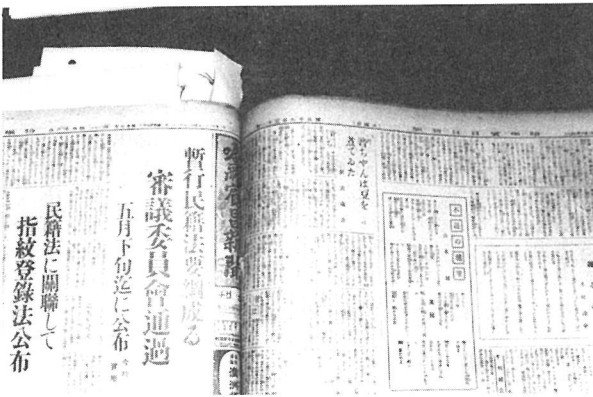
その江口榛一の、南吉の文学に対する評価は、友情の粹に捉われただけのものではなかったと考えられる。

同紙を初出とする南吉の作品は、小説であったか、児童文学であったかの判断が残る。先の、河合弘宛書簡中には、小説と明記されている。『哈爾濱日日新聞』には、常設の子ども欄は無かった。したがって、新聞の一般読者を対象とするからには、当然、小説を意図したに相違ない。しかし、「最後の胡弓弾き」の表題の右肩には、ゴチックで「創作」と明示されている。小説ではない。また、後に第二単行本で、初の童話集『おぢいさんのランプ』（有光社・一九四二年一〇月一〇日）の収録作品自選の際には、「久助君の話」を採っており、しかも、当初はこれを書名とするつもりであった。

これらの事は、当時の南吉の創作意識に、対象を、成人とするか子どもとするかの境界は引かれてはいなかったのではないかと推測する。換言すれば、児童文学は、読者対象の下限が子どもであって、すぐれた作品は、当然、成人にも感動をもたらすものであるとする、今日の児童文学に対する考え方を、南吉は、『哈爾濱日日新聞』掲

〈写真・資料〉

「音ちゃんはお豆を煮てゐた」



「最後の胡弓弾き」



「花を埋める」



載作品の中で、すでに確得していたと考えられるのである。最後に、中華人民共和国の児童文学者羅仙樵氏、浙江師範大学長の蔣風先生、門下の大連師範学校講師の滕毓旭氏、大連市立図書館副館長汪峰海氏と司書の各氏、通訳の王舒岩氏には大きなご協力とご援助をいただいた。心から感謝申しあげる。

『校定新美南吉全集』記載事項

掲載日 作品名 ( )内は掲載日確定・推定に関する記述の巻と頁

- 一九三九(康徳六・昭和一四)年
- 5・4木詩「ねぎ畑 雨後即興」掲載(878推)
- 6土詩「心うつろなるときうた 古ぶり」掲載(878推)
- 10水詩「小鳥に 四月のあさの」掲載(878推)
- 11木詩「蝶(B) 日暮(C)」掲載(878推)
- 17水「最後の胡弓弾き」第一回掲載(320)
- 18木 〃 〃 〃
- 19金 〃 〃 〃
- 20土 〃 〃 〃
- 21日 〃 〃 〃
- 22月 〃 〃 〃
- 24水 〃 〃 〃
- 25木 〃 〃 〃
- 27土 〃 〃 〃
- 9・14木詩「蜻蛉 機織虫 ひよこ 金魚 蛇鼠」掲載(878)
- 15金詩「ぎいぎい虫」掲載(878推)
- 16土詩「殿様蛙」掲載(879推)
- 21木詩「雨蛙 鮒」掲載(879推)
- 10・15「花を埋める」二回分載(323推)
- 不詳 安城高女生徒詩「黑板詩集」二回分載(8453推)
- 10・18「久助君の話」三回分載(2128推)
- 不詳 〃

12/21南吉日記・ノート未発見期間 6/14

『哈爾濱日日新聞』紙面確認事項

掲載日 紙面掲載状態 ( )内は作品収録全集の巻・頁・連載状態を示す行数

- (ゴチック体の月日は今回の調査で確定できたものである)
- 5・4木朝(三)文芸欄中程 3/4段抜き(878/80)
- 6土 〃 〃 〃 2/3段抜き(81/82)
- 10水 〃 〃 〃 (83/178)
- 11木 〃 〃 やや左 (84/85) (同欄に童話「虹」平田渉あり)
- 17水 〃 〃 文芸欄トップ 5段(一) (3172・1/174・15)
- 18木 〃 〃 〃 〃 6段(二) (3174・6/177・15)
- 19金 〃 〃 〃 〃 〃 (3178・1/181・1)
- 20土 〃 〃 〃 〃 5段(四) (3181・2/183・10)
- 21日 〃 〃 〃 〃 6段(五) (3183・11/186・2)
- 23火 〃 〃 〃 〃 〃 (3186・3/188・12)
- 24水 〃 〃 〃 〃 5段(七) (3188・13/191・5)
- 25木 〃 〃 〃 〃 〃 (3191・6/193・15)
- 27土 〃 〃 〃 〃 4段(九) (3194・1/196・4)
- ( )未 〃 〃 〃 〃 認 (886/90/91/93/95/97) (推)
- ( )未 〃 〃 〃 〃 認 (8105/107) (推)
- ( )未 〃 〃 〃 〃 認 (8101) (推)
- ( )未 〃 〃 〃 〃 認 (898) (推)
- 10・25水朝(四)文芸欄トップ 4段(上) (3228・1/230・8)
- 26木 〃 〃 〃 〃 〃 (3239・9/232・11)
- 11・17金 〃 〃 二段(一)
- 18土 〃 〃 〃 (二)
- 28火 〃 〃 文芸欄トップ 5段(一) (2121・1/123・8)
- 29水 〃 〃 〃 (二) (2123・9/126・6)
- 30木 〃 〃 〃 4段(三) (2126・7/128・4)
- (他者作品に付き全集収録せず)
- 9/30 ファイル欠 6/1

6・中旬	11火「家」十回分載(3)303推	31月	三	(3)283推	5・23日「坂道」第一回掲載(3)283推	〃	〃	不詳	20朝か22頃	19夕か20	18夕か19朝	4・16朝か17夕「音ちゃん <small>おんちゃん</small> は豆を煮てみた」第一回掲載(3)249推	30土	七	(3)270推	29金	六	(3)270推	28木	五	(3)270推	〃	四	(3)270推	〃	三	(3)270推	不詳	二	(3)270推	3・23土「屁」第一回掲載(3)270推	27火詩「冬から春へ(下)水雨カタカナ幻想 色紙 童謡」掲載(8)79推	2・25日詩「冬から春へ(中)疲レタ少年ノ旅」掲載(8)79推	一九四〇(康徳七・昭和一五)年
------	-------------------	-----	---	---------	-----------------------	---	---	----	---------	--------	---------	--	-----	---	---------	-----	---	---------	-----	---	---------	---	---	---------	---	---	---------	----	---	---------	----------------------	--------------------------------------	---------------------------------	-----------------

(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	30水	29火	28月	27日	6・26土夕(三)上二段中央に挿画(二)	5・28金	26水朝(四)文芸欄左上五段(二)	(未)	25日	24土	4・23金	4・21水朝(四)文芸欄左上五段(四)	(未)	18日朝(四)文芸欄左上五段(二)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)	(未)		
確	確	確	確	確	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	確	〃	〃	〃	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確	確			
認	認	認	認	認	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	認	〃	〃	〃	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認	認			
(十)	(九)	(八)	(七)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(二)	(三)	(二)	(二)	(七)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)	(二)		
					(3)294	(3)292	(3)290	(3)288	(3)287	(3)285	(3)280	(3)279	(3)227	(3)247	(3)245	(3)243	(3)241	(3)237	(3)235	(3)269	(3)255	(8)114	(8)108	(8)116	(8)118	(8)119	(8)119	(8)119	(8)119	(8)119	(8)119	(8)119	(8)119	(8)119	
					5	8	11	17	1	1	17	3	1	12	8	9	5	7	1																
					294	292	290	288	286	286	280	279	279	249	247	245	243	241	237	237															
					4	7	10	16	18	18	16	2	12	11	7	8	4	4	6																

ファイル欠7/1

3/31ファイル欠1/1